

戒律の唐招提寺 扉の花文様



百橋 明穂

どのはし・あきお 1948年、富山県生まれ。神戸大学教授・日本・東洋古代美術史。著書に『仏教美術史論』、共著に『列島の古代史5 専門技能と技術』など。

極彩色 イメージ覆す

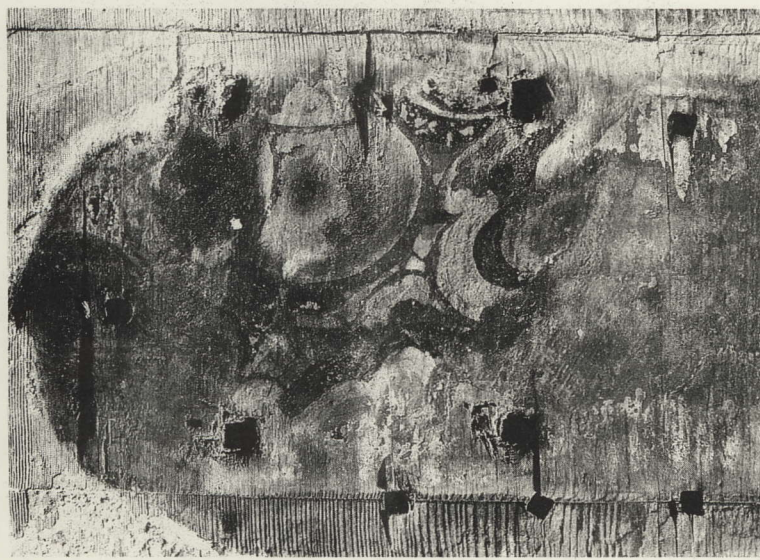
果、すべての扉には当初から種類の宝相華が一段ずつ交互に描かれていたことが証明された。しかし、残念ながら長年風雨にさらされてきた正面扉のゆえに彩色の残るものはなく、創建時の彩色復原は困難であった。

奈良時代の寺院の堂塔の、しかも正面外側の扉においては、彩色文様が一般的だったわけではない。唐招提寺より古い東大寺大仏殿正面の朱塗りの扉には彩色文様はない。それは、平安時代末に兵火によって焼くする前の大仏殿を描いたとされる『信貴山縁起絵巻』に描かれているので明らかである。

『七大寺巡礼私記』から知られていた。その記述から、唐招提寺の外の扉にある蓮を凶化化した蜜絵は特記されるものであったことがわかる。

の蜜絵」すなわち宝相華文様は、唐招提寺の大きな特色であったことになる。朱塗りの扉に大きな宝相華文がびっしりと描かれる様子は、戒律の

色鮮やかな朱色、橙色を呈する発色のよい丹、やや赤紫色を帯びたベンガラと思われる輪郭線、顔料の粒子もきれいな緑青、纏綿(同じ色の濃淡を層状に繰り返す彩色法)をなす宝相華の葉など、その鮮やかさは眩しいほどであった。



唐招提寺金堂の扉に取り付けられていた金具の下から姿を現した創建当時の宝相華の彩色文様

金堂は、鑑真(688?~763年)の在世時にすでにあったという見解もあるが、多くは奈良時代末から平安時代初めとする。鑑真の在世時の特徴を示す彩色文様が発見されたが、これは必ずしも金堂の建立時期を早めるものではない。鑑真は中国から日本に來朝した時(754年)、多くの弟子や工人を伴ってきた。彼らが鑑真の死後、師の故郷揚州の寺院を再現すべく独自の努力を傾けた結果であると考えたい。

寺として知られる質素なイメージとは大きく異なり、豪壮・華麗な外観であった。

宝相華文とは、蓮華文を中心に唐草文と組み合わせる大きな団花文を形成した現実にはありえない植物で、想像上の装飾文様である。中国唐代において発展し、やがて日本でも奈良時代に大いに流行した。しかもその彩色は西域風な纏綿や、寒色系の青や緑、そして暖色系の赤に黄(橙)、ないしは紫を組み合わせた色彩対比豊かな豪華・華麗な文様で、正倉院宝物の中に見出される。

新たに発見された扉上部の彩色文様は、大山氏が明らかにした種類の宝相華文とはやや趣を異にしており、その点でも注目される。扉に大きく描かれた種類の文様は宝相華を平面的に捉えており、奈良時代末期の傾向が強い。しかし、今回の宝相華文は大きさも小さく、葉がうねりや立体感のある異種な文様で、むしろ奈良時代盛期(中期)の正倉院宝物などに近い。色の組み合わせも、明度の高い華麗な色彩対比で、盛期の特徴を示している。

官営工房である造東大寺司では、東大寺大仏殿の造営や他の官立寺院の造営に多くの工人や画師を大動員して、堂塔内の彩色に当たったことが知られている。しかし、官立寺院ではない唐招提寺の造営に関しては不明な点が多い。